

122  
74

東 京 圖 書 館

七 五 冊	20 七 八 號	六 架	三 六 函	小 說 類	和 書 門
-------------	-------------------	--------	-------------	-------------	-------------

繪本通俗三國志

三編

十



繪本通俗三國志三編卷之十

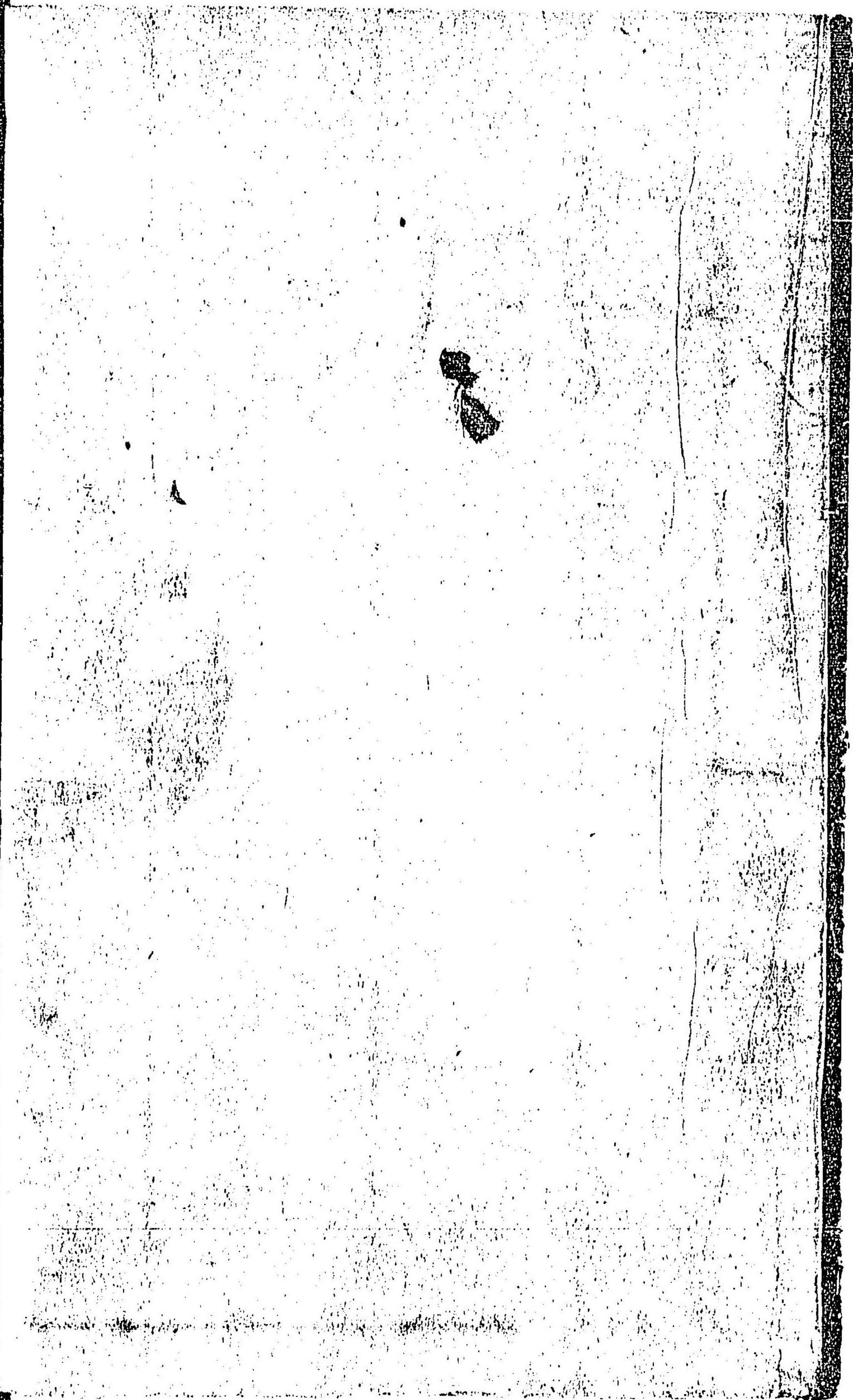
目錄明治十年交換

孔明智激孫權

孔明智說周瑜

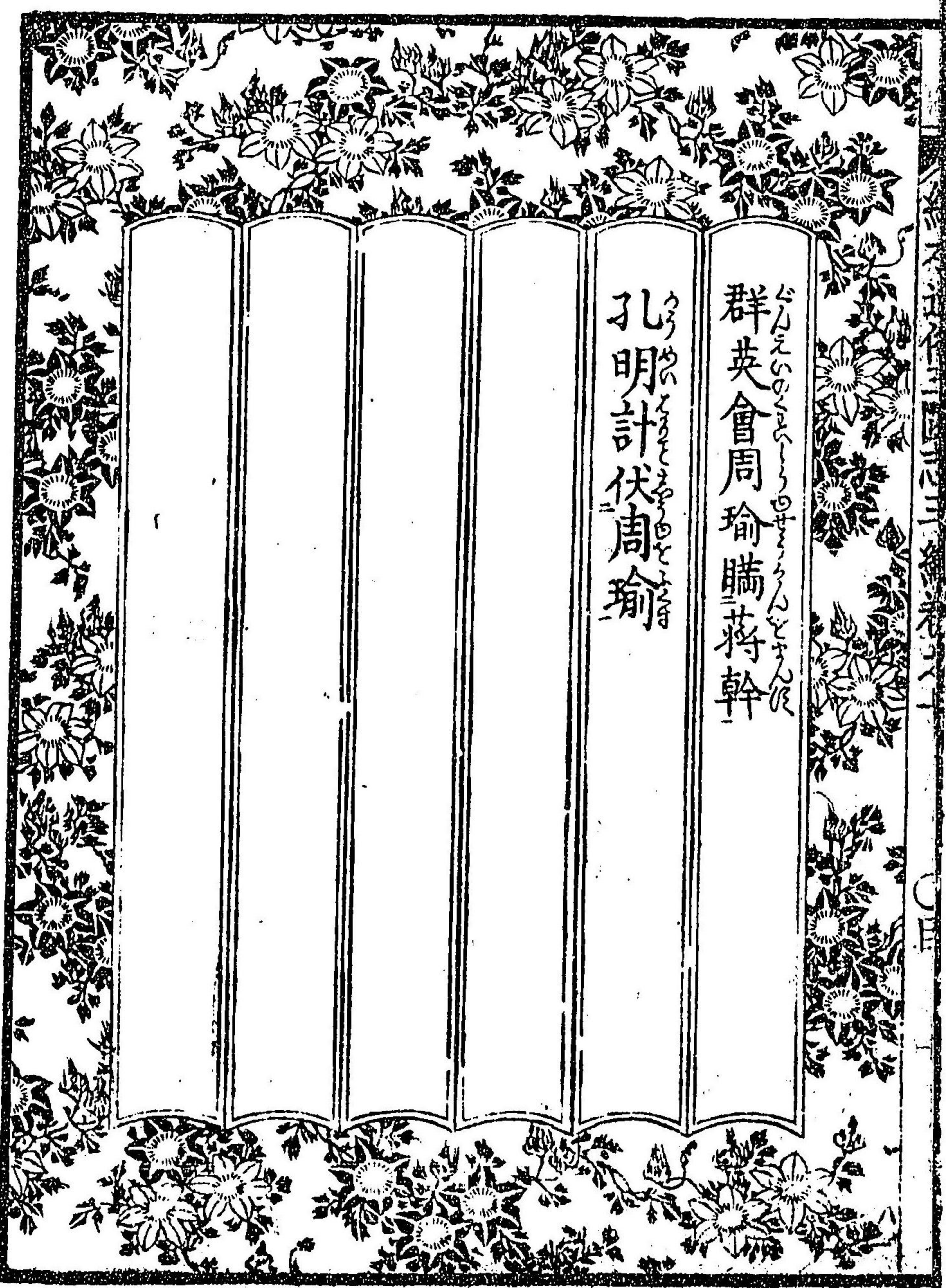
周瑜定計破曹操

周瑜三江戰曹操



群英會周瑜瞞蔣幹

孔明計伏周瑜



繪本通俗三國志三編卷之拾

孔明智激孫權

黄蓋曾肅二人孔明と引中門に入らば諸葛瑾生来  
まの孔明礼とあへるに諸葛瑾が白く汝をよその国に来  
てあんど早くも是れは對面せざる孔明が白某さる來る劉  
豫及びの使ありまのゆへ君の事と先ん私に事の後す  
孫がくを察しぬ諸葛瑾が白く早く入て吳侯見よ後  
對面せんといふ去らば曾肅はさる低語て再びなると  
志まゆの家を孔明巽頭へ堂の上吳主孫權身て大  
て起迎へるに孔明もく再拜を孫權半礼と答  
孔明と坐す精よく孔明再三固辭して坐す

玄德の礼意を述べて、ひそかに孫權が人相をみれば、眼の中碧  
 の影、其の紫あり、堂として一表の人才あり、つらつらその人はず  
 しんと激さざるを、統がこうふんとせむ。うまが問を、問て、  
 さんとせむる名、孫權茶をせむるよしと。文武の大將と、兩方  
 は、排列して、魯肅の孔明が、いりある、答を、せんとして、津  
 谷で、うたつら、立て、た、孫權、や、り、る、る、と、魯肅が、御  
 邊の徳  
 と、結ぶて、きひて、久くその名を慕ふ。今幸に對面して、孫  
 權の教を、きき、孔明が、曰く、某不才、一と無學あり、下問  
 及、辱し、ち、孫權が、曰く、御邊、ち、る、る、新野、あり、く、玄  
 徳を、扶け  
 曹操と戦ひ、ゆり、き、し、が、い、る、勝負を、決し、も、入る、孔明  
 答を、  
 曰く、劉豫及び、兵の千騎、足む。大將、た、三、四、人、と、新野

の城の分内、狭く、兵糧、足む、安んぞ、曹操と拒て、得ん  
 孫權問て、曰く、曹操が、兵、の、その、數、い、る、る、ある、孔明が、曰  
 く、曹操、兵、を、起し、より、呂布を、破り、表、紹、を、滅し、北、番、を  
 收り、遼、東、を、定め、ち、る、る、荆、及び、得て、水、陸、の、軍、馬、百、万、を  
 あま、ま、る、孫權が、曰く、某、よ、い、る、あ、ま、ま、る、孔明が、曰く、某、あ、ま、ま、る、  
 と、や、べ、き、曹操、亮、及び、あ、り、と、い、る、と、い、る、青、カ、の、勢、四、五、十、万  
 あり、袁、紹、を、亡、お、し、と、い、る、又、四、五、十、万、を、得、り、ち、る、る、中、国、を、い、  
 り、い、る、兵、二、三、十、万、の、勢、及、び、得、て、又、二、三、十、万、あり、あ、ま、ま、る、  
 て、量、り、い、る、百、五、十、万、を、下、と、い、る、某、た、百、万、と、い、る、この、國、の、人、  
 の、敬、驚、き、恐、ま、る、る、の、り、と、い、る、あ、ま、ま、る、孫權が、曰く、手、下、の、大、將、  
 ち、あ、ま、ま、る、あ、ま、ま、る、孔明が、曰く、智、深、く、計、を、き、大、將、二、三、千、人、あ

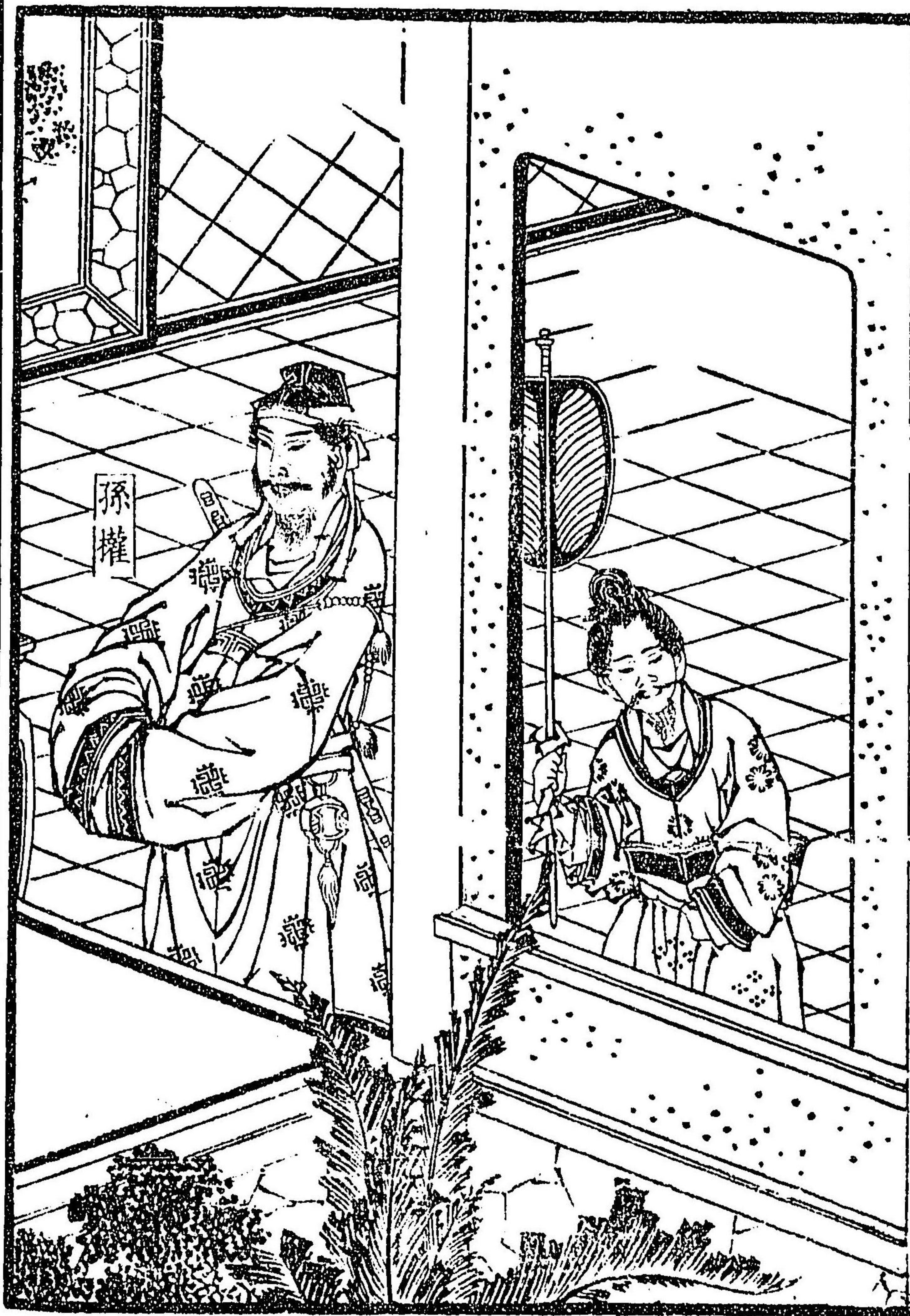
孫權が曰く先生のどききそのつらん孔明が曰く某がてん  
 もの車は積斗の量べしその教てきらず孫權が曰く今曹  
 操荆及び平けて又遠て図るの志ありぬ孔明が曰く曹操  
 は江を以て陣を取てわくの兵船を用意して立あぶる旗  
 は天を蔽ひ數百里を連絡せよ今當國を攻るよあらず  
 て何きの國を攻らん孫權が曰くは曹操のふめがば  
 戦へまじ戦すれん先生福がく一決しぬ孔明が曰くた  
 げとて將軍をらひぬ孫權が曰く福がく金玉の高  
 希てきらん孔明が曰くまよ今四海大に乱きて將軍の兵を  
 起して東吳を據劉豫及び又まよ來てよも曹操と天下  
 とあそふ今曹操四方を順へんとおもひして大畧をいふ其手

属し卒に荆及び破りて威勢をあつて大ありぬのゆゑは  
 いろある英雄の計を用ゆる所ありまよまよ劉豫及び  
 身で逃してまよ來りぬ將軍父兄の業を受て久くま  
 の國を保つひはしよ呉越の兵を起して天下をあつて  
 んとまよひるつて早くと曹操との交を絶ぬは又争  
 りぬとてたててまよひるたつ一の計あり國中を安穩あら  
 せぬ孫權が曰くいろある計ぞ孔明が曰く諸大將の勸  
 まり甲を卸膝を屈て曹操を降参しぬ孫權首を  
 てまよのまよりぬまよ孔明又曰く將軍外に曹操を順の  
 と托て内を天下を争のふて扱今事の急あるまよ  
 決断しぬまよとてまよあらず禍遠から孫權黙然とてい

新編 通鑑 三國志 三 魏 卷之十一

よく答ふ。孔明又曰く、寡固不可、以敵衆。  
 弱固不可、以敵強。入りまき、當然の理あり。將軍  
 えやく、曹操は降りのいさむを、一國の百姓も、塗炭の若き  
 受べし。孫權が曰く、先生の言のどく人を、劉豫が、あんなぞ曹  
 操は降ぬ。孔明が曰く、むろく、田横の齊の社士あり、あな  
 き、守りて、漢の高祖は降む。自害し、死き、況んや、劉  
 豫が、王室の宗親、より、英才、世に蓋、万人、仰ぎ、慕ふ。水  
 の下、よもむくがと。の、済ぬ、天命あり、安んぞ、人の下、  
 志た、らん、や、答ふ。孫權の、あつ、色、と、頼、下、き、起  
 後堂へ、入る。満座の、諸將、孔明を、見て、同音、み、と、笑ふ。  
 曾肅の、孫權が、怒まる、て、深く、孔明を、責、先生、あ、人の、信

る言と、出、の、い。奈、も、君の、寛、洪、ある、人、面、の、あ、り、叱、り、  
 笑、ふ。と、て、右、不、遜、ある、ぞ、と、い、ひ、ま、孔明、天、と、あ、て、ひ、く、  
 笑、ひ、曰、く、さ、ま、い、の、と、氣、量、の、や、の、と、容、と、あ、つ、ま、  
 曹、操、破、る、計、あり、も、精、問、を、や、べ、曾、肅、曰、く、先、生、  
 別、は、好、計、あ、つ、ま、主、人、は、ま、と、あ、て、問、し、ら、ん、孔明、曰、く、ま、  
 曹、操、が、百、万、の、勢、を、入、る、の、郡、れ、る、蟻、の、ど、と。も、片、手、が、  
 動、さ、ば、と、く、移、み、あ、つ、曾、肅、ま、ま、き、ひ、く、た、ち、後、堂、へ、  
 入、り、孫、權、怒、り、ま、休、む。曾、肅、ま、ま、い、と、て、や、り、あ、つ、  
 き、ま、江、を、渡、り、好、人、と、連、来、ま、り、い、ひ、が、ま、ま、と、と、  
 人、あり、曾、肅、曰、く、某、も、今、孔明、を、責、ひ、ま、孔明、は、り、へ、  
 の、氣、量、の、扱、ま、と、笑、入、り、ま、曹、操、と、主、提、の、計、を、輕、く、



孫權



吳夫人

周輝吳  
瑜議  
仁過の  
向治孫  
之定權  
武遠イ

孫  
權  
の  
妻  
孫  
氏





へあり。將軍すく吳の地て保てて武將をもちひて精兵數萬  
は劉豫及び方てあはせて拒きりて之を曹操と破らんと掌  
みのり曹操も一破らるるあらず北國へ逃回らん。其の形  
の荆及び念あて攻取べし吳の國をまゝも患あて其の形  
るへ成敗の機今日あり。孫權喜て曰く先生の計勿忘ら  
がんの疑ひて散ぎ。がんとて一決せり再び義論あて  
を即日兵と起して曹操と滅せし。曹肅の由に諸大  
將を解知せば孔明の客屋へ行てまづ休息する人として  
別して退散せ。張昭の諸大將とて降参らんとて決して居  
たり。忽ち曹肅が合戦を決せりて解来るべきひて大  
敬。其の同志の大將とのめり君とて孔明の生殺きて合

戦は定まら。去来早く行て練んとてまゝ出て孫權のまゝ人  
其ホ君の曹操と破らんと宣てまひてまの人のまゝ君の  
る袁紹と比せらんとて問はるる孫權黙然とて答はる張昭又  
曰く曹操もたも勢もくありしてたごよむたが一舉に袁紹と  
滅せり。況やの百万のあする兵と率一荆及び攻取て兵糧武  
具とて不足あり。威風大に遠近は振君あはてやの戦  
んとてまひてまのあはる孔明が計は出らんとてまの兵  
起しものあまのまゝとて新て負て火で消んとてまの顧  
雍アラスの玄德とて曹操を攻めんとて遺恨とて身  
の七ざるを顧を伏て報せんてまのあり。まの人の孔明  
使としてまの國と結ぶ。まの國はとも曹操と根を

孫そん操そういづる害がいするのふあふ。孔明こうめいが方便べんべんと信しんじて  
 国家こっかの禍わざはひを去おとす。孔明こうめいのいひに孫そん權けんよく答こたへて  
 起たちて後堂こうどうへ入いり。曹そう肅そう外がいあり。又また張ちやう昭しょうが兵へいを  
 起たちて練れん止とむ。ときいひて孫そん權けん見みへて降くだる。  
 張ちやう昭しょう顧こ雍おうが戦いくさひて降くだる。孔明こうめい文ぶん官くわんの  
 富とみ貴きを得えんとす。人ひとあり安やすんぞ又また踏ふみを君きみの為ために討うち死し  
 するのふあふ。孫そん權けん曰いく汝なんぢ退ひれ。孔明こうめいいふ  
 曰いく工夫くわふせん。曹そう肅そう曰いく君きみ疑うたがひの御ごふあふ。張ちやう昭しょう亦また誤あやまる。事こと決けつし人ひと外がい出いけ  
 ば。緒いと大おほ將しょうたる。武ぶ將しょう戦いくさん。文ぶん官くわん降くだる。

孫そん操そうの議ぎ論ろん終はりて一いつ決けつせむ。孫そん權けん後堂こうどうありて寤さ  
 食くわして思おもひて疑うたがひ定さだまらず。案あん煩わづらひ居ゐり。吳ご夫人ふじんの  
 由よしをきひて對面たいめん。事ことある事ことうふ。右みぎ煩わづらひ問とひ。孫そん權けん曰いく曹そう操そう兵へいは漢かんの兵へいと呉ごと攻せむるのふあふ。合あ戦せん  
 よひ。緒いと大おほ將しょうと義ぎ論ろんす。降くだる。孫そん權けん曰いく其その戦いくさの勢せいのさへあつた。  
 恐おそむ。降くだる。曹そう操そうが輕かろくせん。孔明こうめいのいひに孫そん權けんよく答こたへて  
 の内うち決けつす。吳ご夫人ふじん長嘆ちやうたんす。汝なんぢが兄あに孫そん策さく策さくの言ことを  
 内うち事こと不ふ問と張ちやう昭しょう外がい事こと不ふ問と周しゅう瑜よと召よびて問とひ。孫そん權けん曰いく  
 外がいの務ととめ張ちやう昭しょうある。周しゅう瑜よと召よびて問とひ。孫そん權けん曰いく  
 孫そん權けん曰いく醉すいのたぐり醒さる。

新編 魏志 三編 卷之十

ぎ鄱陽湖へ使してきて、まふち周瑜とよみ結まらる。

孔明智説周瑜

あのよ父周瑜は鄱陽湖のありて舟手の勢かと調練し、孫  
操大軍と争うに江漢の陣と取らうとまき、一夜に日  
を回り、舟を岸の辺に著るるを孫權命あつて使  
なまら。周瑜使てた、柴桑のりら、魯肅の福を交わ  
り、のり入まら、右の事、周瑜計あり、孔明  
御辺に、患ひあり、胸中、計あり、孔明  
然、侍ひ、相共、事と殺せ、魯肅欣然、馬  
のり、客屋、出、周瑜、休まら、張昭顧  
雍、張紘、歩騭、四人、みな、報を、周瑜、出、入、た、

は礼をうけて坐定り、張昭が曰く、御辺に、国の利害とありた

周瑜が曰く、い、張昭が曰く、曹操百万の勢とあり、  
漢水の陣と張、このごろ檄文と送る、君と呉を頼せんと

ま、この国と吞んとする意あり、色とあら、

は、降泰とせ、民の苦と免せんとせ、魯

肅江復へ行て、玄德が軍師、孔明とよ、來り、この事

と評議する、孔明、曹操を攻らうと、怖と、國の力を借

て、日比の恨と報せんと、このゆゑ、詞と巧み、君

と激し、合戦を決せ、魯肅一人、一國の民と苦んと

ま、御辺に、事と決せ、孔明、明日君  
見、一言と、降泰とせ、万人の苦と、孔明

3 周 瑜 憤 然 曰 操 之 爲 豈 可 與 共 事 乎 遂 小 曹 操 之 罵



新編三國志三續卷之十

九



新編三國志三續卷之十

九

曰くは四人の心も同し。顧雍曰くは、子方儀も亦同し。周瑜曰くは、常も曹操も降せんとも。明日君を見へて、事と定めん。張昭亦大に喜んで、回りて、程普、黄蓋、韓當、ホト初と、武將や来り見ゆ。周瑜、心入りて、礼と施し、程普曰く、足下この國ちう内、他人の属とる、まのものを。周瑜曰く、いまも、程普曰く、破虜將軍、またが、この國を、命と君、捧げ、禍乱と平定、く、及百度の戦ひ、終、全体、続きたる、あ、瘡と被り、六郡と、臣、君、文官、言、き、納て、曹操、降、入、の、耻、あ、足下、た、身、す、せ、の、耻、被、入、足下

の決断と待り、ホト儀、命と、曹操と破べ、周瑜が曰く、この座の人々、戦ひ、願ひ、黄蓋、み、生手、の額と、あげ、曰く、この首、落、ち、曹操、降、る、下、その餘、大將も降、ま、周、瑜、曰く、本、より、曹操と、安、降、泰、ま、謀、將、の、回、り、明、日、事、と、決、ま、程、普、ホ、と、回、り、又、謀、首、瑾、關、澤、呂、範、朱、治、ホ、數、多、の、文、官、上、来、り、周、瑜、心、く、も、礼、と、ひ、謀、首、瑾、曰く、某、弟、謀、首、孔、明、江、夏、より、この國、来、り、玄、德、の、意、と、述、て、も、好、む、曹、操、と、破、らん、の、味、方、の、謀、將、評、議、さ、決、ま、某、弟、の、事、あ、れ、も、某、多、言、の、事、と、商、議、せ、足、下、よ、り、料、以、

又周瑜が曰く御辺の孔明と兄弟とるは家の私あり。今  
 まは呉の事の公道を以てまはして論せし君の御為に  
 して好むやとやいひゆぞ。諸葛瑾が曰く甚かんとやいひて論せ  
 降泰もさるゆゑ安く合戦の危し周瑜笑ひ曰くまはしよるやと  
 計とあさし明日君を見へて一決まべし。諸葛瑾亦回りしまはし  
 報しく呂蒙甘寧亦その外諸將を来さるゆゑの周瑜ひ  
 へ入まはしその志を問ひ戦ふゆゑのあり。降泰もさるゆゑのあり  
 り。たぐひのあらざるに過ぎりしまはし周瑜が曰くまはしゆの義論  
 の無用あり。明日君の御前まで義を乞ふべし。まはしとて相別  
 れ。まはしとて笑ひ燭を燃させけまはしとて魯肅来り孔明  
 いま門外ありとての周瑜中門を出ひ入請ぐ客位を就し

礼を乞ふとての魯肅又問ぐ曰くまはし曹孫大軍を引て我國  
 と侵まんとす君まはしとて決せし將軍を招て義を乞ふ  
 將軍のいふに周瑜が曰く曹孫の兵を起し勅命と号し  
 て四方を伐する鋒をあらそひて一人としてびざらるはあし  
 まはし國も戦ひて破るるを降るるを保ちまはし  
 せまはしと決せり。明日君を見へば降泰もさるゆゑ魯肅大に  
 ひく曰くまはしとてあはしとて呉の國の基を破る將軍  
 せまはしとて今もまはしとて三世を經り安んぞ一旦の廢をも  
 せと辭しゆいして足下は後の事を囑し置國家をたぬゆゑ  
 かまはしとてあはしとていひゆ。今あはしとて懦弱あるは  
 降泰せしとていひゆ。まはしとて周瑜が曰くまはしとて國の百姓は

受がむと二人と怒むべし。その由は降らんとしてわんも魯肅が  
 かくきつるやと。それ足下の英雄とゆひて長江の險阻は魯肅  
 探つるもか國で侵さむき孔明のひよりその言を二人  
 のあちをみせんと手て袖の入れぎ笑て坐しころりも周瑜問  
 て曰く先生あゝあ人の笑ひのぞ孔明の志のうらむ答て曰く吾  
 別は笑ひのあしたの魯肅の時務とありぬと笑あり魯肅  
 又怪ひてやれん。先生あややゆひの時務とあらむといひゆ  
 ぞ孔明が曰く周瑜の本心魯肅を降らんといひぬ。あは正ま  
 理のゆゑなり周瑜が曰く孔明の時務とある人あり。よきもか  
 と察しぬ人の魯肅色と変へて曰く孔明あややと浩る事とい  
 ひも入る孔明が曰く魯肅が兵と用る。孫子吳子も勝るべし

天下とまら敵さるると得んも敵さるるとの世の英雄あり。  
 曰く呂布表紹。劉表のよも魯肅を敵さるといふ。今益く  
 滅さむとて天下又人あり。たゞる君劉豫及び時の務と志が  
 ぞとてまひて魯肅と衡とあやといひ。今孤身よりて江夏を籠  
 る存せしむとまらんと。今この國の大將降泰と孫が人々  
 とあまの妻女子とるもいひ。あゝ富貴と受んのでのまら樹  
 て。國の滅びる天命はまら。あゝぞこの措むも足る魯肅  
 大は怒て曰く汝もか君も膝を屈て逆賊を降らぬ。方代り  
 笑てとらせん為る。孔明が曰くまら。この計あり。魯肅は禮物  
 と送り國を獻る。ゆゑも用ひむ。たゞ一艘の小舟とあや。二人  
 乃ちのど送りぬる魯肅喜んや百万の勢益く北よりあふ。

新編 三国志 卷之十 十一

ありては刀を血で塗るのあつて國をのびつゝ安んず。周瑜  
 問いて曰く二人といふのありのぞ。孔明が曰くその國より二人がや  
 て出まるといふ人を大本の枝より二葉と落し百千の倉の内よ  
 リ二粒の米を減るがごとく一浩る些少の物あるまじも曹操が願  
 せ塞ぐ周瑜又問いて曰く二人といふのありのぞとて曰く孔明  
 曰くその隆中へ居し北國の人きたつて曹操が事と物誌  
 しけるが曹操ちまゐる漳河の辺に臺を築くまじとて銅雀臺  
 と名付。千石の造臺を畢せり。常は酒を好む色は濃きをた  
 るやと美女を愛せ兼て吳の國を喬公といふ人二人の女のり  
 て。姉は大喬といひ妹は小喬といふ。もよ沈魚落鷹の谷閑  
 月羞花の貌ありやんまじとて曹操常は誓とあり。もよ一

の願ひ天下を得て帝王たらん。二つ吳の國の二喬を得たる  
 の銅雀臺の上へ置老後の樂にあそぶ死せんとし根  
 ちんと入り。は百万の勢を以て帛のどくを威を張るとや  
 ち突つたの二人の女を得ん為あり。早く喬公とてのね千  
 金で買ひたの二人を買取と曹操を送る。百万の勢戦う  
 せしとて回る。まじとてあつち菜蔬を西施と送て夫差と滅  
 せし計あり。周瑜が曰くいふまじとて正しと証據は孔明が  
 曰く曹操が第二の子曹子建といふものよと文と作る。曹操が  
 まよ命とて銅雀臺の賦と作せしるがその賦の中へいへ  
 帝王とてあつたあつた二喬を要するといふものと記せり。周瑜が曰  
 く先生との賦と記すの事や孔明が曰くいふまじとて文章の華



あるて受く今二字とて心まひて周瑜が曰く結ぶるを聞  
孔明とあち銅雀臺の賦と痛む曰

從明后而嬉遊兮登層其室以娛情見太府之廣  
開兮觀聖德之所營建高門之嵯峨兮浮双闕乎  
大清立中天之華觀兮連飛閣乎西城臨漳水之長  
流兮望園果之滋榮列双臺於左右兮有玉龍與  
金鳳扶二喬於東南兮若長空之蟠螭俯皇都之宏  
麗兮瞰雲霞之浮動攸羣材之來萃兮收飛熊之  
吉夢仰春風之和穆兮聽百鳥之悲鳴雲天垣  
其既立兮家願得乎雙匡揚仁化於宇宙兮  
盡肅恭於上京惟桓文之為盛豈足方乎聖

明休矣美矣忠澤遠揚翼佐我皇家兮  
四方同天地之規量兮齊日月之輝光永貴尊而無窮  
乃等君壽於東皇御龍旗以遨遊兮週鸞駕而周  
彰思化及乎海宇兮嘉嘉物阜而民康一願斯臺  
之永固兮樂終古而未央

周瑜さきとまひく座を起し躍りあがり北に向ひて大に怒り  
逆賊曹操とまひて欺とをまひてと討りたは孔明き  
り起しとまひて曰く匈奴中國を犯し天子御  
女との心を胡の妻せ和親とあし戦ひて休め元帝の王昭君  
を送りぬ今あるも人民間の女を惜めぬ周瑜が曰く民間  
の女とあつら大喬の先君討虜將軍の夫人小喬の

あるが其の妻あり。孔明大に愕ひて曰く惶恐こ。こまうの  
 くまうとてあまのき。みだりの恨ひて舌を動かさ死罪。周  
 曰くは誓ひて曹操と打破せん孔明曰く古より事三  
 思ひ入り後みうあらむ悔め今周瑜並切であらう曰  
 く。先君の遺言と受て安んを身と尽て曹操と降  
 んざれ。降泰の事とひひか本んとあう言を。人  
 の所存と釣ん為あり。都陽湖と出ても曹操と  
 若さんりのこと思ひ。首と臨むもちりてんやあ  
 福が孔明の臂の力とそ入る。も曹賊と退治と  
 孔明曰く足下とてのいどん。其の夫馬の勞とて。周  
 瑜怒る。明日府中に入て君とて。即時兵

起る。孔明の曹肅とともあひ客屋へ入り

周瑜定計破曹操

次の日曉天。吳主孫權堂に出て事と評議と。左の文官  
 張昭 顧雍 張紘 步騭 諸葛瑾 虞翻 龐統 陳武 丁奉 亦  
 と先とて三十余人 右の武官 程普 黃蓋 韓當 周泰 蔣  
 欽 呂蒙 潘璋 陸遜 亦と初とて三十余人 衣冠と正。劍  
 佩と整て兩辺と侍立せり。孫權とて周瑜とて  
 あらう。周瑜とて周都督とて報  
 き。とて周瑜とて出進とて礼とあ。け。孫權とて  
 汝都陽湖とて舟手の勢と訓練と。久く神思と勞と  
 べ。周瑜とて君とて國の政事と掌と。其と



の意をきく。張昭答曰く曹操は猛き虎の如し天子の勅命と  
 号して四方を征伐せしむる。荆及び得てその威勢いあり。夫  
 り。この國の曹操と拒むべきもの。大江の險阻あり。曹操今荆  
 及びの水軍をのせしむ。女船の數をある。水陸二手をわたり。寄  
 来る。あまの敵とせしむ。得ん。某が愚意をの計。降  
 泰せん。まづ。周瑜が曰く。ま。御邊に應下なる。迂  
 儒の見あり。そ。國の基は破虜將軍より創て。今。ま  
 三世を経たり。安んぞ一旦に廢べけん。孫権が曰く。父の汝の  
 計を用ひん。周瑜答曰く。曹操今漢の丞相なり。父の  
 實の漢の逆賊あり。君の神武雄才。兼備して父兄の業を承  
 東吳六郡の地を保ち。兵精く。糧足り。英雄漢の如く。ま。

の國の人あり。右のどく侮る。孫権が曰く。御邊の  
 意の周瑜が曰く。君と。謀大將と評議し。入る。孫権  
 曰く。ま。この事と評議する。降泰と。ま。此  
 あり。合戦と。ま。周瑜が曰く。ま。降泰と。ま。此  
 権が曰く。張昭も。降泰と。ま。周瑜と。ま。張昭と  
 問て曰く。御邊に。降泰と。ま。

のて忠て尽さんものと思ふより天下は横行く民の害を除き  
 國の逆賊を平ゆるべし況る曹操がゆる来く首を斬る  
 と望むの身は屈て降参る今某が計は北國を  
 平あらしむ馬超 韓遂虚を棄く曹操が後の患を平く  
 曹操が勢よく入る北國をばらの馬の上より兵船  
 へ舟の上より動のものを曹操の馬上より兵船  
 て入りて困をあらそふ二のありは冬の末はせめて  
 寒氣をおどし馬の飼草もあふ二あり中国の士卒を引て  
 とく海辺に陣を取り水と服せむ病をまぜり四あり  
 四の軍のたある曹操は病を犯す君曹操を生  
 取ゆの計をあらむ今日あつ某がの精兵を引い

まし復れ口を出て君の為を敵に破り孫權大に喜んて曰く  
 曹操常に漢の天下を奪んとすは袁紹 呂布 劉表  
 といふは皆怖る今大半滅せしめては一人あふ残さ  
 りは皆言て雌雄を決せんとも汝幸に戦はんは  
 の祐ありをあらむは合へり周瑜が曰く某君の為は身  
 を捨曹賊を破らんともは君の御心を疑ひて決せむ  
 るの怖る孫權佩る劍を抜前ある案をとて破る  
 へ汝ホよりくの大将とび官吏をたはし曹操を降す  
 とその案と同らんとすは劍を周瑜に授け即  
 時に封じ大都督とす程普を副都督とす曹操を  
 尉とす若下知る皆くものめらぶの劍をひき

新編中国書紀三卷之十一

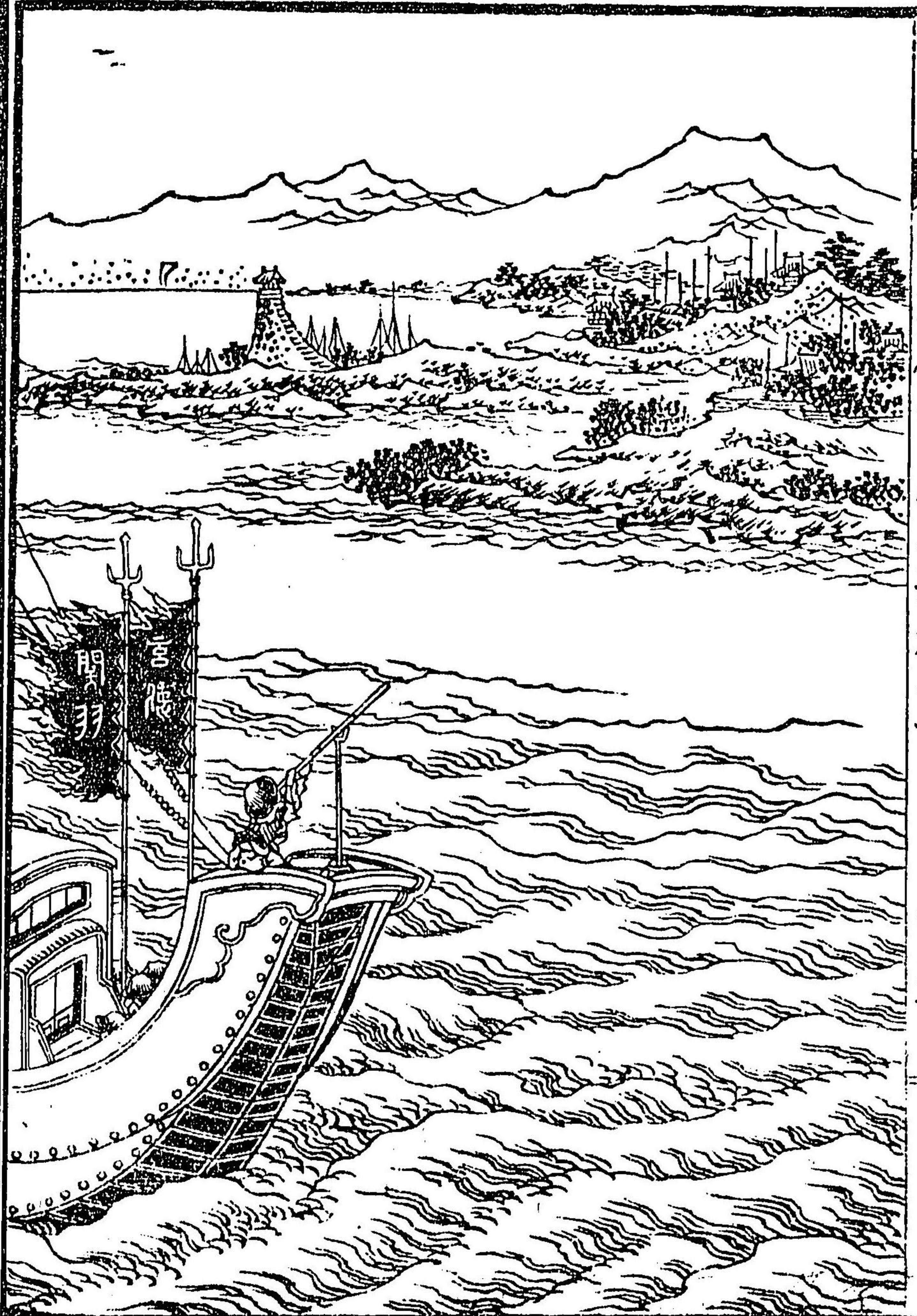
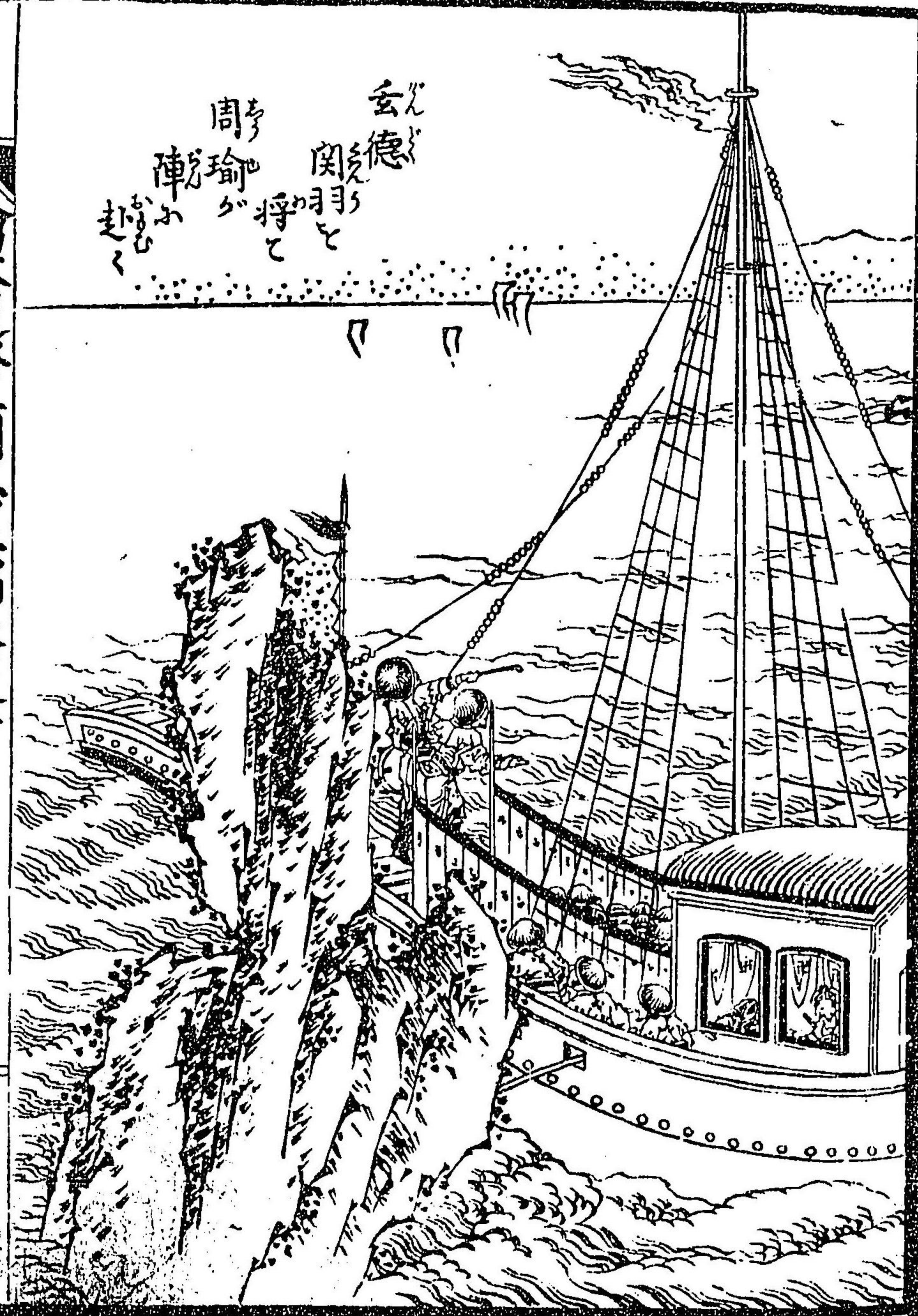
まづ周瑜剣て受取諸大将の命を奪ふ。君の命と  
受兵と起し曹操を破る。明日は江の辺に生の手配と定  
めん。早く来よ。下知とせよ。違背の輩は七禁  
令。五十四斬。あらざる軍法を正せよ。と孫權は辭して座  
を起し。諸大将を言あはして退せし。周瑜の家を回りて  
孔明を召き寄。今日の評義合戦の事決まらば。先生孫が  
く良計を示し。申す。孔明曰く。量るは孫將軍  
の御心。あがみ。計を決し。周瑜が  
曰く。懸あらざる。あるも人ぞ孔明曰く。孫將軍もも  
不敵衆といふの意あり。足下二度行く軍數を説示し。孫將  
軍の疑とあり。懸あらざる。事あらば成就せし。周瑜は

よもごとく又府堂へ行く。孫權を見し。孫權問く曰く。都督  
夜中に来るは。ある事。故あらん。周瑜曰く。明日は兵を調  
へ。さぶら。合戦の色とあり。君の御心いよく決し。孫權が  
曰く。曹操が兵多き。人寡不能敵衆。の外は疑ひ。孫  
周瑜笑く曰く。其の来り。いよく入る。御疑ひ。晴さる。為  
君も。曹操の機文と見え。大兵百万のいよく。誠と思。召  
て。その虚実を料らざる。怖る。其の。其の。実を較る。中  
國の勢十五六万。だき。とく。疲は苦し。ちう。北  
紹は。残おし。その勢七八万。いよく。おは。の  
得。彼。た。それ。疲。兵。疑。何。百。の  
り。の。怖。足。其。五。の。精。兵。率。立。破。ら。ん。

君のあらざる疑ひあり。孫權大に喜び周瑜が臂を撫て、  
 汝が言ふるといふくも、合への張昭の計ありて、妻子  
 を顧てお私のもて懐きたる汝を曾肅と忠誠を益しく戦を  
 の精兵とえらび兵糧武具船筏ホマとづく用意せり。汝  
 曾肅程普と先手よきも、軍を引て跡を續  
 ん。先陣まきんでるよ合さるひも、あつてあつて、旗  
 下の兵と一處におつたれ。さういふ曹操と共の勝負を決  
 べ。事とて是のどし汝を先手よきも、疑ひありて、  
 疑ひありていひらるる周瑜拜謝しく退き、さういふ内  
 ともいふね、孔明のよき君の根と料りきまつ。いふ事

の違む才智より、一等上あり。後さういふの國の禍と  
 ある志し、孔明を殺し、後日の患を除んとせむ。いひ  
 きうは使と死と曾肅とを孫まひさる。孔明を殺すといひ  
 まる。曾肅が白く、今曹操のまを破ま  
 ざる。賢人と殺す。万人の物笑とあらん。さういふ大丈夫の  
 為らぬ。周瑜が白く、孔明を生置が後うおさ。徳  
 を扶て、國の禍とあき。曾肅が白く、一計あり。孔明を  
 諸葛瑾が弟とま。命とて。孔明とて、國のよとあ。共  
 御方の用ひある。さういふ。大慶あら。周瑜が白く、さ  
 まと。究竟の事あり。さういふ。從人とて、次の日早天行  
 立て、江辺の陣屋とて、中軍を入と、高座に就く。左右

徳川 関羽  
周 瑜  
陣 将  
赴 心





護衛の兵武具と携へて相集り文武の大將尽く出て下先  
 ときく副都督程普の國中故老の大將ある上平也又周瑜  
 入超しつゝその下立んとてん取てその日虚病と嫡子程  
 咨と代はしつゝ周瑜令と傳へて曰く王法の親あり諸將よ  
 くその職を守りぬ今曹操権とてん罪のえあごとくまこと  
 董卓も超天子と許昌の囚と暴兵とてん國の馳りま今君  
 の命と受て民と勅し罪と討功あると賞し罪あると罰しと  
 親疎の阻とつゝ韓當黄蓋と先鋒とも大小の兵船  
 五百余艘とてん入と今三江の岸へ行て陣屋と造る蔣欽  
 周泰と第二の備とし凌統潘璋と第三とし太史慈呂蒙  
 と第四とし陸遜董襲と第五とし呂範朱治と四方の巡

警言使とまも水陸もみまことみ期と定めてひとと出合とて  
 八と大將とまことと出立ま江辺に生まり程咨の家  
 二回りと父程普の今日の手配あて熟りつゝ程普馳りて  
 下るつゝ素より周瑜の懦弱とて大將とまこと足と  
 してやひつゝ今日の下知まこと大將軍の才と備まると  
 年長とたまはつゝおんぞうまも服せざるまこと遠く自  
 出とその罪と謝と周瑜のひとるも諸首領と召て曰く御辺  
 の弟孔明の誠と王佐の奇才あるも惜むらつゝ身と居て  
 事今幸とまの地と来まると御辺とつゝ行つゝまも論  
 今より玄德とまことあつゝまの國と住れ御辺とつゝ君と  
 けと兄弟一處と居るとまも大ある慶とまも福とつゝと勞と

いそぎ早行で論じ、諸葛瑾が曰某の国の事と君の恩と  
 蒙り、尺寸の功いもあさむ都督の君の忠と尽さんとあ  
 のの命トも、某あんど辞まじらんを、即時馬に乗  
 客屋へ行て對面せんと報らるる孔明出む久く拜哭し  
 疎遠の情と終り、座を定り、孔明泣き、諸葛瑾泣き、  
 る、孔明の古の伯夷叔齊が事といふも、孔明の一言  
 ときひて、ややくと、周瑜が計あるべしと、曉り、  
 某とあち答て曰く二人の古の賢人といふも、及んぬ、  
 諸葛瑾曰く二人位と讓りて、困と逃、後周の武王と、  
 かく、首陽山の誓と、周の粟と食、卒に  
 餓死しく名と遺せり。活ると死も兄弟一所あり、死するも

一所あり。今この御辺り、同胞骨肉の兄弟、  
 二人別、その主事、年々逢ふ、伯夷叔齊  
 が志と視て耻ぢんが、孔明曰く兄の宣、義  
 あり、義と忠と孝と三の内、重くと、諸葛瑾  
 が曰く、人の君の忠と、親の孝と、本と、義も  
 亦、欠く、孔明曰く、其終つる兄の御身、忠と  
 全し、孝と盡し、義と守り、道の教へ、諸葛瑾曰く  
 ある事ぞ。孔明曰く、某と兄と、漢朝の人あり、  
 り、君劉豫及び中山靖王の後、漢の景帝の玄孫、天下  
 あり、兄弟と、劉豫、事、  
 あり、全する、兄弟、父母の養へ、江の

北より兄は「江北回り。朝又拜掃して谷を  
 ありしを。孝と盡す。忠孝と全く。是を  
 ある劉豫及び扶け逆臣と誅して再び漢の天下を興へ  
 ぶ。又義と全する。兄忠孝の二つを置る。其  
 む兄と一処におもひて義と全せよ。宜しう。孫が  
 りと答へ。諸葛瑾の内より弟と招請さん為り来り。却て  
 弟は説きなりと思ひ卒に一言の返答も及ばず。相別く周瑜が陣  
 行右の事と諒つ。周瑜が言ひ御辺孔明が言ひ従て江北は回らん  
 り。諸葛瑾が言ひ君の厚恩を受安んぞ。是を志と  
 へ。周瑜が言ひ御辺よく忠義のふめ。是を志と  
 ぐ。是を別く孔明と伏せるの計あり。孔明は

諸葛瑾より出て出るなり

周瑜三江戦曹操

周瑜が轉孔明と憎む。汝はわがと辨古と振るも卒に殺さる  
 ものぞと。孫權は暇と精のち程普魯肅と孔明を  
 むく入る。孔明欣然として従ひ来り。一同舟に乘帆とあげ  
 く夏口の方まで。三江と離る。五六十里まで。舟  
 次第とま。水寨と備へ。周瑜が中央あり。張陸  
 西山と。據て陣屋と連ぬる。五十里あり。手  
 陣取尽く。定り。周瑜が諸大将と中軍あり。使  
 り。孔明と。孫く。孔明が岸の辺に小舟と繫ひ。居  
 ぐ。使と。中軍入り。座は直り。周瑜問て

新編通鑑三國志三統卷之十

中つるハ昔曹操の勢少く袁紹の勢多し。二人自馬官渡ニ  
 支テ戦ヒテ之ヲ曹操のさある計でゆひて袁紹を破りたる先  
 生ハ深ク兵法を明ぢゆめりありあつたどその詳あるまづりある  
 秘づるも教ぬ人孔明の内よまた又もそとて害するの計あ  
 るべしとてしひひききせとあるち合て曰く某うまづ一の曹操よ  
 く許攸が計いでとちひて袁紹が烏巢の兵糧を焼尽したる  
 まよひたつて一戦の功をあせしつ周瑜喜んで曰く先生の言ま  
 つや妙あり曹操は八十三万の兵ありつるが勢あつたつる三万  
 あり。あまもつて敵まゝるゆり得んうあつたつて曹操が兵糧運  
 送の路を塞ぎそのち計でゆひて攻破らんとす人を生ずと  
 ましうしむる曹操が兵糧の減く聚鉄山あり先生元より

荆州に住ゆひてよくその辺の地理をわたりあつたつては君の為の  
 りあまも先生秘づるありとて謀計とあつたつて夜中へ聚  
 鉄山にまで入り曹操が兵糧を焼ぬ。あまも千余騎の兵を  
 むひて援くべし。うあつたつて辞退しゆめ孔明のゆりし  
 候然と一も回りぬ。あつたつて諸大將もととと退生を曹肅  
 ひする周瑜を問く曰く今日あまも入り孔明をさ一向ゆめ  
 周瑜が曰くも孔明を殺さんともゆめつたつて罪あつたつて賢  
 人が殺せりとして天下の人を笑ましゆめゆめゆめ入り曹操  
 が手も借る孔明を殺させ後日の遺はのぞくゆめゆめ曹肅  
 くの内に孔明が体も伺もゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 孔明もあつたつて始る色も用意して生んゆめゆめ曹肅も入り

孔明曰。先主のたびの突向ありす功を盡  
 さんとす。孔明笑て曰く。水上の戦。馬上の戦。車  
 の戦。歩卒の戦。いとく。その刻を極めざる。あ  
 るぞ。功のあまざる。愚とせん。吳の國は足下と周瑜と二人の  
 二の能あるが類。あまざる。魯肅が曰く。周瑜と  
 の能と宣つらある。孔明笑て曰く。吳の國の  
 小兒どもがら。陸の関と守る。魯肅一人水は浮んで  
 戦へ。周瑜ありと。御辺の陸の戦は。余とあらず。  
 周瑜の舟軍と志の。餘とあらず。安んぞ。及ん。今  
 我と聚鉄山に向く。周瑜陸路の戦とあらず。魯肅  
 魯肅への周瑜の右と告ぐ。周瑜大に怒りて曰く。孔明あ

といふ。陸の戦とあらず。今。一万余  
 騎を引く。聚鉄山より。曹操が兵糧を焼尽して。手并  
 孔明と。孔明笑て曰く。周瑜の志と聚鉄山は。やめんとす  
 る。曹操が手と借て。殺せん。計ありと。あかり  
 ぞ。今。孫將軍が劉豫及と。もよんとあせぬ。事。  
 あらむ。調へん。一たびは害にあらざり。曹操を滅ぶ  
 さん。曹操の計。まて。殊人の兵糧を断りて。得物  
 とせり。いんぞ。兵糧は油断あり。周瑜を死せしむ。ひ  
 の。生取せしむ。一たびは。舟軍と。北國



勢の銳氣で挫ぎ。別々良計をゆめを攻破るべし。足下孫がく  
 周瑜の怒りて、ち聚鉄山はむらゝのりて、練めぬといひ、魯  
 甫回ひて周瑜の怒るる。周瑜足てとびて、白く孔明が智  
 るまゝに勝まら。今日死さざれば、後にあらむと害とあさんと計  
 と案どらるるものより、玄徳は劉琦は江夏の城を守らせ。ゆ  
 ら手勢を引く夏口は土ふるる。江南と望とぬ入らびと  
 陣屋とはら緑色の旗幟風みひるぐへ、ゆゑに人々を  
 呉の困るる兵を起さよと、の内大は喜び、樊口より入る  
 陣を取高き入人の上せとせぬ。入る人々の南の  
 岸はとびく、呉の困の陣あり北の岸はひらき、相のこへ  
 とあまの曹操が北國の勢ありとす。玄徳は將とぬ。

孔明、吳を行くより、音信なき。行くと虚実を伺  
 んど、いひ入る。糜竺が曰く、其後がく行くと、玄徳もあやう羊  
 酒禮物とて、のへ汝と機とて、変は應せよと、宣は糜竺三  
 とも、ち小舟に乗流るる。直に周瑜が陣に到り、番兵  
 その名を問く。周瑜は報て、玄徳の使とて、糜竺を禮物  
 と送り、来まら。告は、周瑜は孫と對面。糜竺再  
 拜し、禮物をさげ、玄徳の意と、迷はま。周瑜喜んで、あ  
 接待とて、糜竺が曰く、孔明は来りて、よむ好とむ。び力  
 かせ、曹操とちぶる。孔明は何くも居る。孫がく、對面  
 へ、周瑜が曰く、斯兵とて、曹操と破る。も、孫がく、  
 け、行くと、玄徳の對面。大事を議せんと、孫がく、





一 艘の舟に從者二十人あり。周瑜笑て事さへ。掌の肉  
 ありて。周瑜問て曰く相從ふ舟の者なる者。答て曰く。一  
 中軍より入る。周瑜請じて帳中に入。禮をせ。上座を  
 讓ふ。玄德の曰く將軍の名天下傳く。よと。當世の俊傑  
 あり。其の區々の不才い。重礼を煩さん。と。賈主より曰く  
 坐し。の入を。周瑜酒宴あり。く。持成をも。孔明の  
 れあ。く。江の辺。生く。玄德の來り。の。み。の。妙法。と。き。く。大。驚  
 い。き。し。周瑜が陣を行く。門前より。魯肅の。あ。ひ。の。帳外。立  
 て。い。る。座中の氣色を伺へ。周瑜が。高。の。殺氣。あ。つ。く。両。旁。の  
 壁。に。幕。を。ひ。き。中。に。曲。者。あり。て。入。り。し。む。ね。の。大。車。此。時

あり。と。玄德の体。を。と。る。物。語。の。よ。い。言。ひ  
 関羽剣を執り侍立せ。孔明も。あ。い。て。安ん。周。瑜。も。と  
 する。関羽で。怖。る。あ。ら。む。よ。の。入。と。手。を。生。か。す。と。い。ふ。の。卒。と  
 内。へ。入。ら。せ。り。と。又。江。の。邊。に。出。る。周。瑜。の。酒。宴。半。ひ。つ。て  
 きた。と。玄德。と。る。関。羽。剣。を。の。み。昔。に。立。た。し。問。て。や。る  
 あり。と。ある。人。の。と。い。ふ。と。玄。徳。の。曰。く。関。羽。字。雲。長。と。そ。と。あ  
 り。某。が。弟。あり。周。瑜。が。曰。く。性。日。顔。良。文。醜。を。討。て。入。る。玄。徳  
 の。曰。く。ま。も。あり。周。瑜。志。気。の。汗。を。あ。が。し。又。數。盃。を。飲。む。を  
 ば。玄。徳。問。て。曰。く。將。軍。の。は。曹。操。を。破。る。兵。數。の。も。ど。う  
 あり。と。周。瑜。答。て。曰。く。三。万。あり。玄。徳。の。曰。く。恨。む。ま  
 の。寡。し。安ん。と。曹。操。が。八。十。三。万。の。勢。を。敵。さ。す。ま。き。周。瑜。笑。て



あり存ト。御迎と生たりのいふくも、樊口へ回りのり。まのよた  
 魯肅のひびくる。周瑜の問て。今日あふく、玄徳と殺しぬ  
 へびる。周瑜曰く、関羽の世の将あり。つね  
 玄徳が昔と去む。手生せ、関羽あふく。まのよた  
 殺さん。魯肅怕まて舌と巻あふ。曹操が方より使あつて  
 て書簡と生も。周瑜あふく。皮とめ、書簡と封ト  
 て。操大丞相付周都督の表書あり。几も、周瑜大に怒り  
 使者と引生く。悪口。卒に書簡とひらき、  
 て微塵もひきまらぶ。武士の命とく、使者と斬まていひ。魯  
 魯肅のまて曰く古より、兩國相争、来る使と斬ざる法あ  
 り。周瑜曰く、あふの法、いひ、あふの敵の使と斬る味方

の威、あふく。あつて、卒に首と封落。その従者あふく  
 て追回。曹操あふく。怒り、兵と起さん。あそ  
 の用意とせよと、甘寧と先手ト。韓當と左備ト。蔣欽  
 と右備ト。も、手分とあふ。夜の四更、兵糧と使ひ  
 五更、舟と生、鉄炮と用意。大石、あふ、待掛り。  
 曹操、周瑜使と斬、書簡とひき、破りたつ。まのよた  
 の外、怒り、速ふ水軍の大都督、蔡瑁、張允と召生。明日推  
 寄とま、周瑜と破り、ち、吳と攻んと、荆、降、泰、乃  
 大将と先手ト。も、大軍とめ、後陣と備、四更、兵糧  
 と使ひ、五更、舟と生、三、江、へ、寄ると、建安十三年、十月  
 朔日、風あふ、浪平あふ、寄手の舟、三、江、を、攻、寄、大、鼓、を

打て嘯と造る。とれたる呉の舟はたある旗を立て一人の大將  
 舟の頭より出て大音あげ我のされ甘寧ありて手柄の  
 ぞとてよよとぞ呼つらる。蔡瑁あまきみて大に怒り弟の蔡  
 璠とよよとぞ真先まきとぞ喚き呼んで池へまき甘寧らぞ  
 て一矢を蔡璠と水中に射落し敵の大將と射取こり手始  
 よまきぞ蒐まきとてまの舟と敵と一陣まきとぞ怒つらる。放  
 ちらまき曹操が勢あつてさかぶる。左より韓當右より蔣欽  
 二手はわらまき攻蒐り鉄炮と飛し石と投打り雨のごとく  
 甘寧は勢ひみのりて敵の舟を飛移り後陣の備を射と入る。曹  
 操が後備へまき北國の兵あまき舟軍と習とてさか大江の  
 上より大浪を涌き目昏き魂消く働き得とてまか立攀り

甘寧味方とまき平地上  
 と走るがごとく嘯と造り攻蒐る。周瑜も又後陣の舟と下知  
 し甘寧も力と添らまき巴の刺する末の刺はいる。まき曹操  
 が勢死するやの投とまきす。えらまきとて逃たり。まき周瑜の  
 の内は寡の衆を敵せまき長追の無用ありとてまの金とまき  
 し味方と収ちる。

羣英會周瑜瞞蔣韓

此日の戦は北國勢敷もまきとてまの曹操陸の陣の上と兵  
 とての蔡瑁張允と責て曰く。今日の戦は敵は小勢味方  
 は大勢あると却て負けるはらある。ゆへに汝一人がんとて  
 ざるまきとてまのたびまきとて重祿と負まきとて軍



吳城郭

吳城郭

五虎小橋



張飛  
歸帆  
迎

法て正まき一蒸瑁が白く荆及びの舟手の勢久く訓練よ  
 てまこといそその外北國の兵ふり舟に乗らあきまふ動  
 て得も吳の國のまのどぬい勿少なり水は馴と舟に乗て平  
 地のどくへいぬま川水中に寨柵とる入北國の兵で中居  
 て荆及びの勢で外置毎日訓練しと蒐引て教あふのち  
 熟しく用いべし曹操が白く汝三人の舟手の勢の大都督へ  
 宜きものあらばまき問ごとく料をいべし蒸瑁張れ命  
 と受てまの四十二座の水門とる入大船と外に居て城郭と  
 小船と内は居て往來の便と通し晚のいとき燈火を  
 焼くまびとせしれと一天の星斗は異あふま陸の陣ま烟  
 火とへま三百里ま絡繹としく兵糧と運車のはなき雷霆

の東に相似たりまのよと周瑜の都合の軍を討勝て曹操  
 大軍怕るま足かきとてその趣を吳主孫權に報し甘  
 寧と弟一の功と一韓當將欽とその次としとく恩賞  
 のいそその夜高ま上て遙望ま西まのたの火の光天地を  
 てらま周瑜あらしんで左右を問て曰くままの光ぞま合  
 へま曹操が陣の燈火あり周瑜大まといとる早舟  
 一艘と用意し今夜まの行へ曹操が陣屋の体と伺へま  
 魯肅黄蓋あんとい大將八人てまあひまあ強きま持驚  
 て張くまとく舟に乗両方青布と幕とし士卒二十余人  
 櫓と推せ樓上ま鼓樂と奏しく志けり曹操が水寨ま近付  
 ば夜半の比ま至りま石を下しとまの陣屋を

体で伺ひ周瑜でとろひく曰くおまがびらに。凡夫の態もあ  
さきもさ深く水軍の妙で得たり舟手の都督のいである  
左右を尋て曰く荆及び大將蔡瑁張允二人あり周  
瑜は白くもとるく呉の國を居住して舟軍を著したるよ  
おんど計らん浩なる奇妙のやのあさんといふまの二人  
を殺さんん曹操を破得ふといふ其酒を吞て伺ひ居るも  
ハ番兵のよと見付くまると本陣へ注進を曹操までま  
くおんさぶるのあつといひそる舟を平しく周瑜を擒ませ  
早舟でとあへるまに周瑜その気色をとりて去るに  
させ二十余人の士卒を擧げ推させ飛ぶといふ去るまに曹操が  
城水寨で坐ると見るととる十里のありて阻て追掛せしす空

しく回て曹操を告るまに曹操大の驚き昨日陣で員と大  
は銳氣を失ひ。今又陣中にて見ると忽ち一人もと入るに其幼なり  
周瑜と一處に書て學んで親まの兄弟のよし。縁がなる  
三寸の舌で動し。周瑜の利害を説いて味方を降ししめぬ  
よま徳を擒させん曹操喜んでをまにといふまに九江の人の  
蔣幹字の子翼といふとおち帳下の幕實あり。曹操問て  
曰く足下周瑜と交深き。蔣幹が白く御心を安んたなる  
某は行が事あるはずあるに曹操が白く足下あると推し  
行ん蔣幹が白くたの童子一人僕二人をきたりし舟を乗るの  
たるに。曹操大の喜び。酒宴をあしく送りし蔣幹もあ

かち綸巾りんきんをいへば道服どうふくを着てま一艘いっそうの舟ふねを出いす。周瑜しよが陣じんの  
行ゆきで故人こじんを將幹しやうかん来きまりて報かへす。周瑜しよの志しをきひて冷笑れいせう  
ひ曹せう操そうが方かたより説客せつかく来きまり。汝なんぢホウヤウほうやうくは計けいをせよと  
て説せつ客かくの將しやうよくかく教しよへ衣冠いくわんを正ただしく従者じゆしや數かず百人ひゃくにんを引ひ  
ひひ錦衣きんい花帽けわぼうを着まてさるる出立いせとちとて入いる。周瑜しよ從者じゆしやを兩  
幹かんの童子どうしと来たがへて昂然かうぜんとして内うちへ入いる。周瑜しよ從者じゆしやを兩  
方かたははら糸いとをひる地上ちがうに拜をひ。蔣幹しやうかんが曰いく足下そくかより  
是こゝでのち恙つかあるらん。周瑜しよ答こたへて曰いく御辺おのへなるべし江えを渡わたり  
来きりなす。曹操せうそうが説客せつかくをさるる蔣幹しやうかん色いろを失しひやめり  
てやうるる足下そくかとて程ほど久ひさし。近比ちかひ威いを吳おの国くにに振ふるひ  
ゆゆきひく昔むかしや説せつ客かくらんらんとて来きりたりありとて説せつ客かく

容ようと宜よろぞ。周瑜しよ曰いく。是こゝ古いにしへの師曠しきやうが耳みみをあら糸いとをひ。故ゆゑ  
歌うたをきひく雅意がいである。蔣幹しやうかんが曰いく足下そくかとてさるる人ひとを  
御辺おのへで怕おそる。曹操せうそうが説客せつかくをさるる人ひとをあら。周瑜しよの  
おのずかかおんおんとてさるる回まわり。禮らいをあら。上座じやうざ  
と讓ゆづり。諸人しよじん將しやうとてさるる一々いちいち對面たいめんさせ。金銀きんぎんの器きをあら糸いとをひ。  
光目ひかりめとてさるる錦綉きんせうの袖そでをさるる霜しものあら。武ぶ器きをあら。  
へ。堂上たうじやう堂下たうかの蔣しやう士しとてさるる兩方りやうかたに立たち并ならぶ。周瑜しよ酒宴しゆえんと  
さるる半酣はんかんとてさるる軍中ぐんちゆう得勝とくせうとてさるる樂がくを奏そうして説せつ  
大將たいしやうをさるる同窓どうそうの書しよを學まなぶ。旧友きゆうゆうあり。江北かつか  
り来きり人ひとをさるる曹操せうそうが方かたの説客せつかくをあら。周瑜しよ曰いく定さだ



て疑ふとありまて大史慈やよび生。汝の志をくもる。劍を帯  
 せよ。今日かためて旧友の生合なまは昔の好酒を吞んとせよ。あや  
 こもる。曹操の國との合戦のゆゑのゆゑのあや此劍  
 立あつて斬て弃よといひまは。大史慈劍といひて席  
 上坐す。蔣幹がまていひて針の席坐するがと。周瑜が  
 曰く。兵起してよりまのこ一滴の酒も吞まざらざる。今  
 未だ故人のあやもやも疑ふとあり。秘がくもる。よ  
 酔く。まのまの樽氣とまらんと。座上の酒有て取連。諸  
 大將一人づつ代り起て。巴才とらる。舞臺て貞と添はる。六  
 周瑜もひたの。蔣幹が手とり。帳外に出。諸軍勢は  
 堂下。立あつた。あやと。いふ。あやの壯ある。

あるまて。蔣幹が曰く。兵糧のどま。雄勢あり。周  
 瑜又やくの兵糧山のてある。あやいひ。兵糧を澤  
 山あつた。あやと。蔣幹が曰く。兵精く糧足まる。  
 御名の高ま。蔣幹が曰く。周瑜大に打笑ひ。又營中へ入て  
 鞍馬武具のどま。見せ。酔たる真似な  
 し。御辺。同窓の書と學び。死  
 今日右立身せん。幸ま。この國は。あや  
 用ひる。蔣幹が曰く。御辺の高才。今ま。過た  
 り。周瑜又蔣幹が手とり。大丈夫の士。知己の主  
 遇て。外君臣の義。内骨肉の恩。いひ。謙とあ  
 せ。あや。計を施させ。従は。禍福と

も受て生死と同人せんともなほ古の積秦張義陸  
賈鄴生がてきまものり来て詞懸河のどく舌利力のどく  
あるも安んぞよふとふんと動さるりて得ん況んや今時章と  
尋絲句と摘し腐を儒者あんとぞ。二面の詞とめりて等閑  
みよふも説とやふらん金鉄より堅ていけく大もふひひま  
は蔣幹のものとふふと顔あつらふ土のどくふハカや錐  
よて刺るばし周瑜又帳上も回りとて酒宴とあしく認  
大将とあつち。まほはまふる國の英雄あり今日日は羣  
英の會説へや飲といけくやと半醉もよび日も暮  
せまうけまは燭とやわしく昼のどく周瑜とめりて起て劍  
と抜く舞とあせふ満坐とあ手とらめとまきと和と。その歌

よ曰く

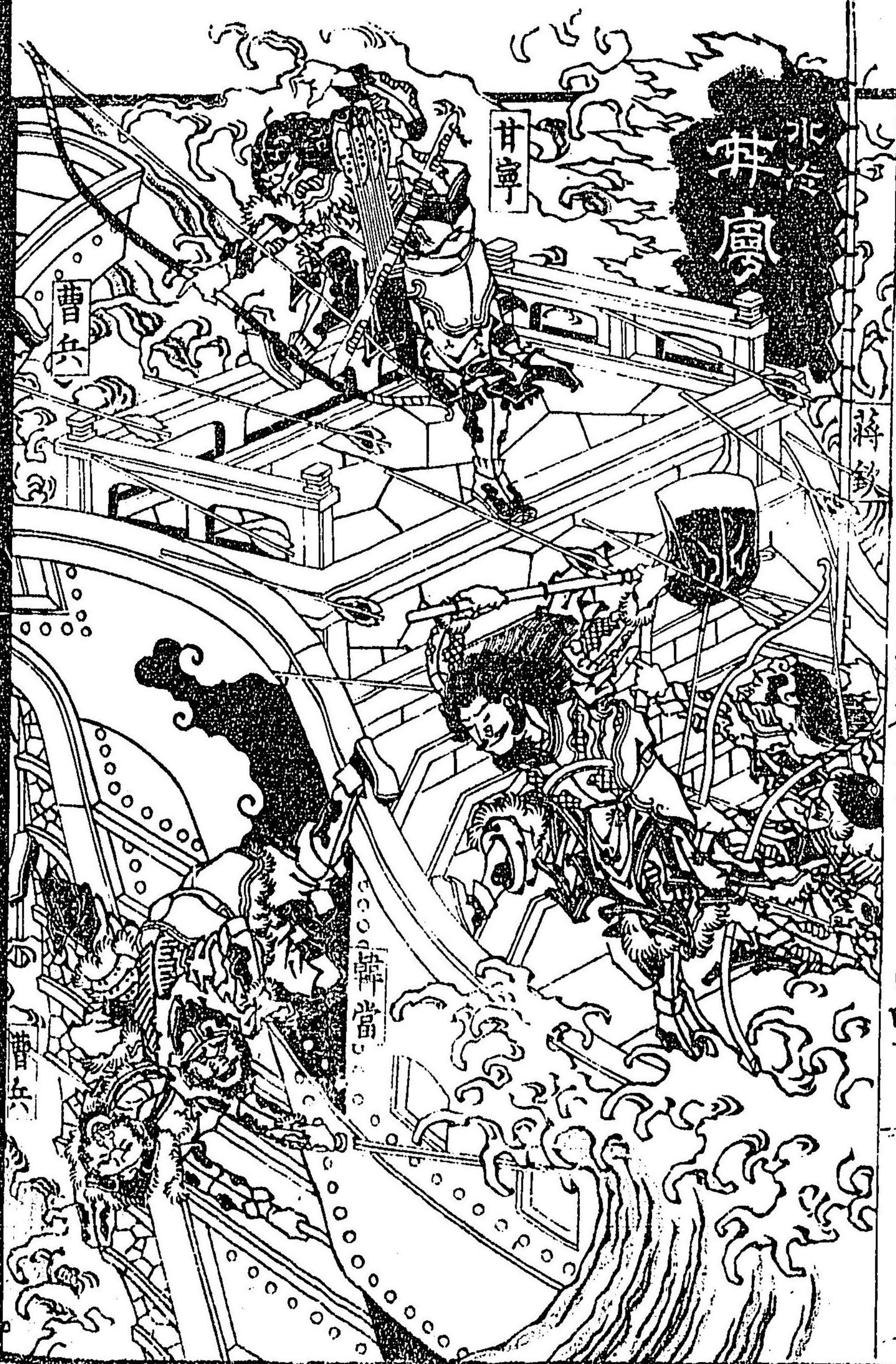
大丈夫處世也立功名功名既立也王業成王業成也四海  
清四海清也天下太平天下太平也吾將醉吾將醉  
考舞三乘相鋒

謡ひるんで慷慨一滿座とらぐく酔て尽せば蔣幹一人その心碎る  
やうよとぞくくる夜は深更よとふんで蔣幹酒は勝もと酔はる  
周瑜その手とりて曰くへく御辺と同日床は伏たて今夜は足  
とやどへて眠るぞ。ああ方へ来ぬとぞ。よも帳中に入り。よとあり  
エーのあまは周瑜のつわりて大に酔たる真似とあし衣帯解  
てあなはも。臣吐狼藉床の上平卧せり。蔣幹ももたへて眠る  
のあつちも軍中。まてよ。四更の鼓と打て。きひてひそるる起く外

くわんてい  
しんぎ  
ていつて  
茶璣と  
彼中お  
没すい

會入殿全三國志三編卷之十

〇四十一



會入殿全三國志三編卷之十

〇四十一

ともども残燈あかぬけの光を照して周瑜が射雷のどひそ  
 り起つた傍に伺ひては卓の上よりその書簡ありひかた  
 まるごとくその陣中佳束の書より内は蔡瑁張允謹ん  
 で封ぎて書たるありありと駭かてひかた人ともその書は曰く  
 某寺降操非圖仕殺其自勢迫耳今已賊北軍  
 困於寨中但得其便即將曹賊之首献于麾  
 下早晚人到便有回報謹此敬復希其察  
 蔣幹大は愕然たる二人舟手の惣大将を羨みて味方十三  
 万の軍兵と司るいふに「浩る逆心あるとた天ある禍あり」とも  
 ひそ書簡と懐み入きて立ち上りて周瑜を味方と見せしむる  
 燈火と打消しく蔡瑁へ行ゆる周瑜口の内は糊と舎と蔣子

翼も立ち入り内は曹操の首をせりしむるのひりまは蔣幹の  
 ともども答てあきとあつて子翼公をいひてはりし人ともあ  
 とも曹操をあらうして首てえせんとひかた蔣幹そのも人衣  
 問んとするに周瑜を寐入ぐそののほど蔣幹床の上伏そ  
 ともども四更のどりのひかたつらつらと一人外より来り周都  
 督醉ひたるぬくとよびひかた周瑜夢うちてはりし人ともあ  
 起あがりたる穴味たるそのあか人ぞと問その人答て昨日故  
 人の蔣幹と同ド味は寐ひかたあか人問ありてはりし  
 周瑜後悔してやりし人ともその大事を羨みひかた  
 滴の酒とも吞ぎつて昨日を酔て前後をりし人ともあ  
 り。汝のまともとよびひかたあかの用ぞその人答て曰くは今日此

新編 太平御記 卷之三十一  
 御記 卷之三十一

入り来りて周瑜きりし声のひらきよのふりてあき  
 蔣幹やよびりて蔣幹は深入りて体よき答も周瑜のひき  
 帳外に生るまゝ蔣幹はとてまじきことしきくもあはれ江  
 北より来りし由も張允蔡瑁もひびきし隙もあはれまじき  
 事あはれ成難しといひてそのちひ言ひてあはれは  
 周瑜のあはれきやのりて周瑜又帳中より蔣幹をよびりて  
 深入りて体よき答も周瑜又帯てよびて野たのり蔣幹  
 の内周瑜の智慧深きことあはれ夜あけは「あはれ書きた  
 りぬるのひきあはれ」といひて五更のあはれまじき周瑜を呼  
 ぶも深入りて鼻息志のありていひて「あはれ」論中よ著童  
 子よあはれ足早は轅門の辺も生るまじき番のよき推止り夜

深く何くへ行ゆの問蔣幹が白くは周都督と志がまじき夜  
 あはれまじき事ありて事妨あはれ近日も又来らんとい  
 ひるまじき番の兵もあはれ苦くつらきとて通しけり蔣幹岸  
 へあはれ舟をたの糸飛がとて江北より曹操とてい  
 へば曹操の事成就せると問蔣幹は「あはれ」某志あはれ  
 まじきやせし周瑜の鉄石のよきとて説くことあはれひけ  
 るまじき曹操怒りて曰く事あはれ是非あはれいひて敵よ  
 笑まじき口惜くまじき蔣幹が曰く某周瑜とて説得もよき却  
 て一大事やまじき来りし人退りし人曹操近侍の人  
 ぞあはれまじき事と問蔣幹右のよきまじきとて執りてあはれ  
 書簡を出し曹操とていひて怒り奴原

新編 太平御記 卷之六十一



曰く某の周都督を賀す。人よ此の相違を得  
 ず。曾肅が曰く賀す。孔明が曰く周瑜の御  
 弟某が来る。さうぬや探りぬ。喜す。曾肅は  
 う。あひ先生。問ひ。孔明が曰く。計は  
 蔣幹を殺し得。曹操のち。愕入。あ  
 され。喜あり。曹操の毛玠。舟手の都督。某  
 の三人の舟軍の法。却。舟軍の都督。曾  
 肅が。口をひく。あ。他事を。孔明が曰く。計は  
 孔明が曰く。孫が某の事。周瑜  
 が告る。告る。言。起。曾肅が曰く。  
 本陣。周瑜。怒り

孔明と生置る。計を。早く。決  
 して。殺す。曾肅が曰く。孔明を。曾肅が笑す。  
 周瑜が曰く。私を殺す。公道。怒  
 心。周瑜が曰く。孔明。日。破  
 ぎの日。將。孔明。破  
 然。出。周瑜が曰く。敵を破  
 ん。大江の上の戦。曹操。勝  
 得。先生。計。孔明が曰く。舟軍。多  
 め。周瑜喜。先生。言。合  
 る。周の大公。許。武具。造

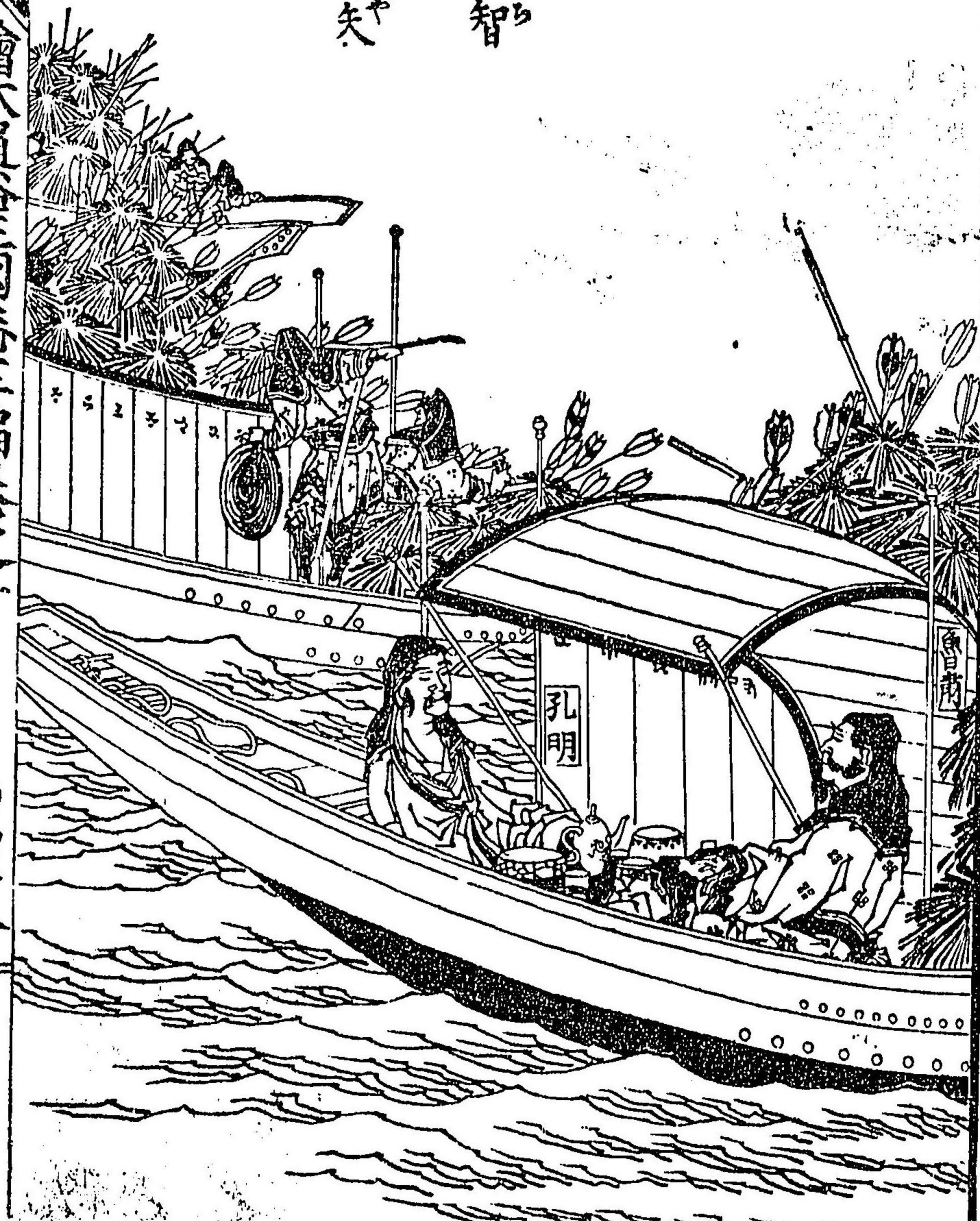
いさゝか軍中ぐんちゆうの矢やも乏ふせきあり不足あり先生せんせい孫そんが巧たくま匠じやうの命いのち
とく十じゆ万まんの矢やと造つくりたぐひも君きみの為ためなまがらあらず辞ことば
退ひきあるべからず孔明こうめいが白まをくはまことと矢やと造つくの法はうとあらへり
十じゆ万まんの矢やと造つくとあまやうめめいひと安やすし。日ひ期きと定まめて作つく出でと
ん周しゆ瑜ゆが白まをく十じゆ日じつの内うちに造つくりて得えん孔明こうめいが白まをくいさか敵てき境けい
よめいひの戦いくさんもまのうごこし。十じゆ日じつに定まめぬ事こと延ひれん大おほ
事こととあまやう周しゆ瑜ゆが白まをく先せん生せいの造つくりて孔明こうめいが白まをく吾われ
らあまやう三日さんじつの内うちに十じゆ万まんの矢やと造つくるべし。周しゆ瑜ゆが白まをく軍ぐん中ちゆうに
戲あそ言ごふ。孔明こうめいが白まをくはまことと戲あそ言ごふ。孫そんが巧たくま匠じやうの命いのち
と書かく。一日いちじつの約やくとあまやうもあまやうも罪つみと被かかす。周しゆ瑜ゆが白まをく
らまは軍ぐん政せい司しとありし。孫そんの命いのち前まへに軍ぐん令れい状じやうと書かせ。酒しゆ宴えん

と申まをす。孔明こうめいが白まをく今日けふ只ただ暮くるといひ明日あしたよ
り第三だいさんの日ひに五ご百ひやく人の士し卒そつとらふ舟ふねの辺へに造つくりて十
万じゆの矢やと運たんしめよと。數かず盃さかづきと飲のむもさるれば諸しよ將しやうも尽つ
く退ひ散さんす。曾そう肅しゆが白まをく周しゆ瑜ゆが問とひて曰いはく孔明こうめいがいひひの
許もとに命いのちを送おくる。周しゆ瑜ゆが白まをくはまことと命いのちと送おくる。私わが
いのちあらず。諸しよ人の前まへに三日さんじつと約やくとあせり。ま
両りやうの股または翹たかげ生せいぜん。飛とぶも回まるも得えず。巧たくま匠じやうの命いのち
と相あ違たがひ。第三だいさんの日ひに御ご邊へん船せん中ちゆうに行いく。氣け色しきとらふ。
さへ曾そう肅しゆとあまやう孔明こうめいが白まをく舟ふねに行いく。孔明こうめいが見みる。孔明こうめいが白まをく





孔明が  
智  
一  
時  
十  
萬  
の  
矢  
を得  
る



入るるまで前後濛々とくくつらつら孔明の曾肅と酒と飲  
 五更のころつとくく曹操が水寨の近付二十艘の舟と西より東よ  
 ひきはらるる徐晃の鼓とくくの喊とくく造らるる曾肅大の拍と  
 戦もたつたつたのの狂ひのの曹操が大勢討て出づるせん  
 てやひののののの孔明とくく曰くは量るる曹操の奸  
 雄もたつたつたのの霧深きまらるるまらるるくく出来らるる  
 ホルまらるる酒と吞雲霧の晴とくくの回るるくく  
 のの御辺とくく拍とくく笑ひののの居るまで  
 は曾肅のまらるる百色土のくく安まらるるまらるるくく曹  
 操が方々の喊のまらるる駿ひく毛玎于禁のまらるる本陣の報は  
 まらるる曹操のまらるる舟手の兵のまらるる調練せざるまらるる岸の

の辺の鬼生兵と下知して曰く今夜の雲霧四方の掩と咫尺の  
 内はまらるる敵のまらるる伏兵とくく。とくく呉の兵  
 水上より自由とまらるるくく出づ打負べ。たる舟手の  
 射手とくく乱矢の射とくく。又陸の陣へ人遣  
 張遼徐晃とくく。三千づつの射手と率とくく岸  
 の辺のまらるる雨の降とくく射させらるる。後まらるる方の射手  
 とくく敵の水寨と攻入らるる拍とくく奪つるまらるる  
 夜まらるる明方とくく孔明十分の夫と受雷いめく近  
 寄と居たりる曹操が方々の暗とくく。たる雲霧の中の  
 鼓の声喊の声とくく徐晃精兵とくく水寨  
 とくく力と尽しく射たつる。日出て雲霧晴まらるる

孔明もさし舟を収め二十艘の束祿たる葉は矢の立たるを葉  
 の毛よりなせりし。さたうらうら声もあひ。曹丞相の矢を謝せ  
 とまじくせり。同音もあひ。飛ぶとくは馳回る曹操もさ  
 てまじく安らぬゆゑ。まじく追付よとて射て出らるる水々  
 急あり孔明が舟もさし一余里で隔たれば。いづれ追ひ叶  
 へず。孔明もさし舟をさし。曹操大は後悔し。將も牙を咬み。軟  
 魚も孔明の魯甫もさし。舟をさし。矢の立たるを四五千  
 あらまの。吳の國の力もさし。費さざり。とて。十万人ある矢と  
 得たり。あつた天をさし。却て曹操を射あは。あんの不足り。さし  
 いひ。魯甫が曰く。先生もさし。神も通せり。あつた。今夜の大  
 霧もさし。孔明笑く。とて。大將たるもの。天文も通せり。地理

とまじく。奇門とまじく。陰陽と曉を陣図と看む。兵勢もさし  
 うらま。庸愚の才あり。あつた。用もさし。三日以前  
 今夜大霧起らんとて。計もさし。あつた。日と定めて造ら  
 んと。約せり。まじく。周瑜が十日の内とさし。矢を造るも用ひ  
 らぬ。日限相違せり。罪もさし。落さし。計もさし。  
 浩も風流もさし。十万人の矢を造ら。命もさし。天もさし。周  
 瑜のさし。害もさし。得んと。あつた。魯甫拜服と  
 舟もさし。岸もさし。着もさし。兼て。人夫五百人岸の上もさし。矢  
 と精取んと。孔明もさし。二十艘の舟より。矢を抜集り。さ  
 十万人の矢もさし。魯甫のさし。周瑜もさし。由もさし。詔も  
 周瑜大は駭き。慨然と。嘆いて。孔明が神機妙算は

がてよぶあふあらむとく。門外坐師の礼ゆゆの  
敬ひ孔明が曰く報の小計あふぞ奇妙とす。足ん周  
瑜が曰く古の孫子呉子あふぞ。是は御入の  
きとく。もる帳中へ入る酒宴とあり。昨日呉主孫權より使  
の。早く戦て催し。曹操と破まし命とあり。其  
良計と得む先生秘づくま教ゆといひ。孔明が曰く其  
碌たの愚才足下の江東の豪傑あり。いづ計あふぞ。周  
瑜が曰く。もる曹操が舟手の陣やうをひんるま。と  
法度よ叶ひ容易ま近付がし。先生は昨夜その体と伺ひ。  
二の計あり先生秘づくま。論より孔明が曰く。其は  
あふ。一の計ありもる手の中書と。同々同々。

べー周瑜をあらむ喜び。硯と取寄二人手の中書と。周瑜ま  
づ手とひき。孔明をさして。火の字あり。次は孔明手か  
生ま。周瑜をさして。火の字あり。二人たふ笑と。体  
も周瑜が曰く。計と符とあせなむ。外渡  
し。孔明が曰く。君の為の事あり安んぞ人な渡  
さ。足下も。計と行の。費と飲と。別を

繪本通俗三國志三編卷之拾大尾

# 繪本三國志四編

近日出来

黄蓋献計破曹操之首 孔明七星壇作法行雨赤壁の  
魏軍八十三万騎を虜にす 孔明の智謀奇計  
周瑜を度し死せしむ 曹操を驚屈せしむ 條々この編に始まる

皇都 池田東籬亭校正 印

東武 葛飾戴斗畫 印

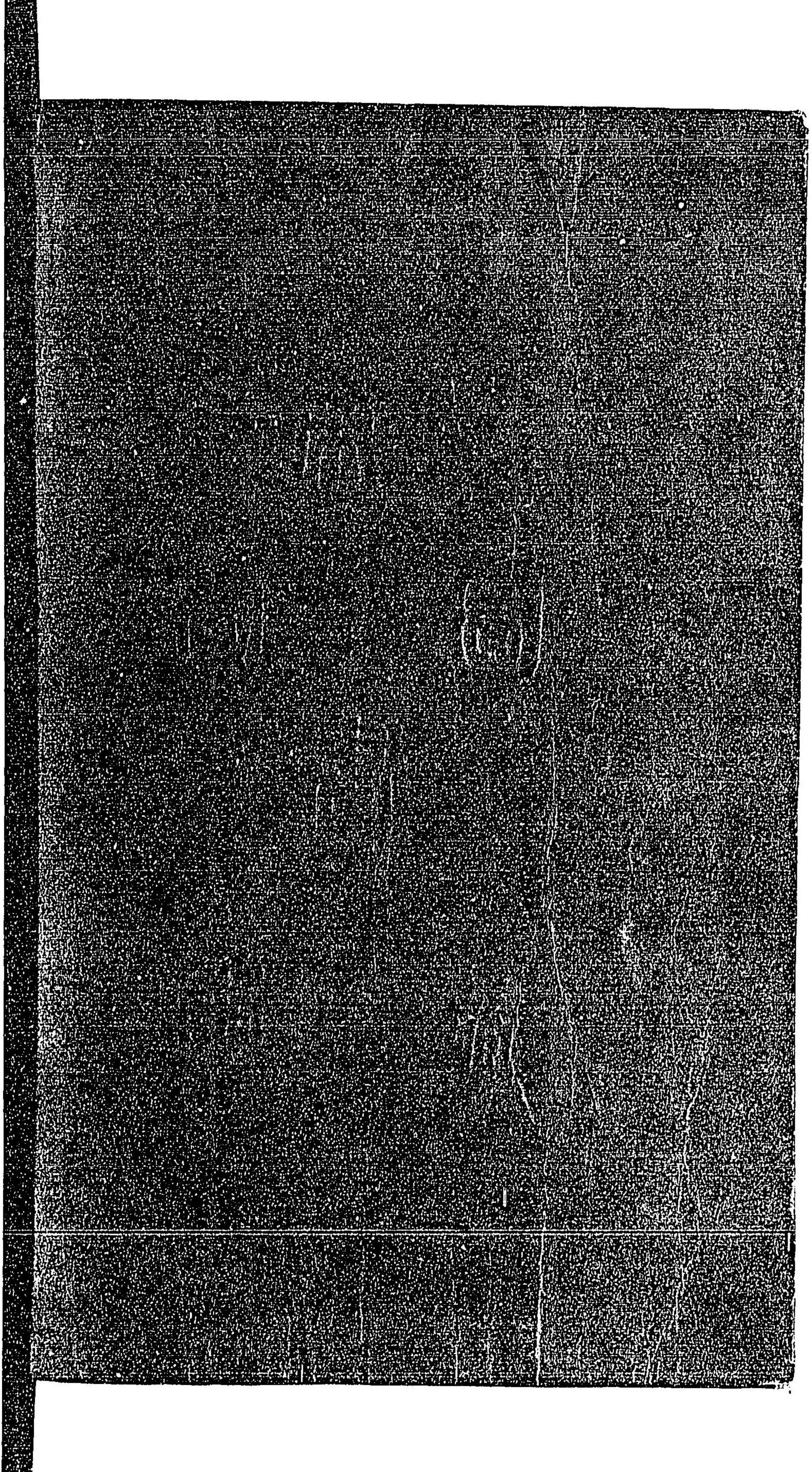
浪卷 内山蟻窟書  
京師 井上治兵衛刀

和漢 西洋 書籍賣捌處

大阪心齋橋博労町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

122  
74  
28





122  
74  
28

繪本通俗三國志

三編  
十